

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 今井 祥子

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程

【研究題目】

The History of the Acceptance of Japanese Food in the United States
(アメリカ合衆国における日本食の受容の歴史)

【研究の目的】

本研究ではアメリカ合衆国における日本食の受容の変遷の歴史について扱う。特に 1970 年代以降のアメリカの現代社会における日本食産業、及びそれを取り巻く環境の変化に注目する。日本食についての考え方や消費の変化から読み取ることのできる、人々の人種やエスニシティについての概念や価値観の変遷を辿り、アメリカ現代社会を食という文化史の観点から再考することを目的とする。

もともと戦前まで日本食は日系人コミュニティの中で限定的に消費されていたが、現在では全米の至る所で「sushi」が日常的にテイクアウトされ、日本人以外のアジア系経営者や従業員によって切り盛りされる、現地の顧客を対象とした日本食料理店も少なくなかった。この変化はいかなる要因によって生み出されたのか。このような問題設定のもと、日本食を食する意味を考察し、またアメリカ合衆国のみならず全世界における日本食の発展と展望を見通していくことが本研究の狙いである。

【研究の内容・方法】

本奨学金を利用し、上述した研究目的を達成するための具体的な研究方法として、(1)大学図書館等における文献収集およびテキスト分析(2)日本食産業関連施設でのフィールド聞き取り調査を実施した。

- (1) 大学や市立図書館における食文化研究のための基本文献や料理本の収集および分析
料理本執筆者や食品製造業者から発信された情報が、新聞や雑誌のグルメ批評などの出版物や、広告、テレビ番組などのメディアを通じて、どのように消費者へと伝達され、解釈されてきたかを論ずるため、現地で刊行された日本料理に関する料理本、料理雑誌、レシピなど食文化に関

するアーカイブスを豊富に所有するニューヨーク市立図書館等を訪問して文献調査を実施した。これらの資料の分析を通じて日本食に対するイメージがどのように構築され、またアメリカ国民によってどのように解釈されてきたかについて考察した。さらにオンライン記事やレストラン評価サイトなども利用し、エスニック料理として日本食を食べることが、彼らの階級意識や人種、エスニシティ、アイデンティティについていかなる意味を与えているかについて分析を行った。

(2) 各都市の日本料理店における参与観察(ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトルなど)

日系移民との関連の深いロサンゼルスやシアトル、現在の新しい日本食の主要な消費地であるニューヨークなどに展開する日本食レストランを訪問し、デザインやコンセプト、メニューや料理、食材や顧客に関する情報の収集を行った。また、経営者や従業員に対してインタビューを行った。ニューヨークにおいて約 10 店舗、ロサンゼルスおよびサンフランシスコ、シアトルの各都市においてそれぞれ約 5 店舗ずつを調査の対象とした。

さらに、シアトルにおいて日本食料品店を経営する関係者より話を伺う機会を得、長年に渡りアメリカの消費者に日本食材を提供してきた経験についての情報を入手出来た。

【結論・考察】

19 世紀後半の日系移民の流入以後アメリカ合衆国においては、生の魚を食べることから日本食は野蛮で否定的なイメージを想起させるものだった。ところが、第二次世界大戦後の日本経済の成長による日本のイメージの向上や、1977 年の「マクガバン報告」を火付け役としたアメリカ国民の健康意識の変化により、日本食は日本からの駐在員や移民だけでなく、次第にアメリカの一般市民にも受け入れられるようになり、1990 年代以降は特に sushi が市民権を得るまでになった。現代のアメリカ市民にとっては、大都市を起点とする sushi ブームに乗り、おしゃれで「クールな」日本食を食べることが中産階級としてのステータスを保証し、その価値観を顕示するための有効な消費行動としてみなされるようになった。こうした現象はアメリカ合衆国だけでなくヨーロッパや他のアジア諸国にも広がり、日本食ブームが食のグローバル化の一例とも言える日本食ブームが世界的に進行している。